

---

# 泣きそうな二人とオレンジジュース

森かえで

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

泣きそうな二人とオレンジジュース

### 【Nコード】

N0220F

### 【作者名】

森かえで

### 【あらすじ】

ベランダで物思いにふける男の人と、ジュースを飲んでいる女の人。郷愁と、新たな二人の物語。

## （前書き）

ある漫画家様の作品からいくつかのキーワードをお借りしました。  
敬愛と、幻の次回作への期待をこめて。

薫風が真つ白なレースのカーテンを揺らす。

シユンは腕を組み、ベランダの柵にもたれていた。ジーンズの尻ポケットから、小さな携帯ストラップが顔を出している。

「猫型ロボットなんて柄じゃないなあ」

コワモテのクセに。グラスの氷が、カラカラと音をたてた。濃縮還元のおレンジジュース。手の中で、みるみる薄くなっていく。

シユンはレースのカーテンを開けて、携帯をソファに放った。可愛いでしょ、と爽やかに笑う。男くさい。胸がつうんとした。

「ミホは、変わんないな」

「あんたは変わったね」

なんとなく、長く目が合う。どちらからともなくふうつと、微笑み合った。

私たちは幼なじみだ。

アパートの互いの家を行き来して、家族ぐるみで仲がよかった少年少女時代。男まさりで暴れてばかった私が、シユンを色んな場所に引っ張り回してた。

楽しく遊び回ったあのころも、そして離れてからも、時はみるみると過ぎる。

今ここにいるシユンは顎ヒゲを生やしてて、マルボロと、しゃれた銀のライターも持ってる。気の弱い仕草や八の字眉はどこにも見えなかった。見たことない男の人になっていた。

私たちは昨日再会した。小さい頃にみんなでよく行った、実家近くの海で。

「シユンはなんであそこにいたの？」

夜、夜中だった。

だあれもいない、と、思ってた。だから私は訪れたのに。

「なんか、落ち込んだり、してたんじゃないの。目の色とか声とか、ダークだったし」

私は死のうと思ってたよ。絶対、言わないけど。あのテトラポットから、人生投げちゃうつもりだったんだよ。

あるとき、シュンに話しかけられて、ビックリした。それから、すごく泣きたくなった。昔みたいに声あげて、泣いてしまいたいつて、思ったんだ。

シュンはソファに浅く腰かける。骨張った指で、オレンジジュースのグラスを手にとった。

すこしの沈黙。グラスについた水滴が、じわつと指を濡らす。心の中がうるさい。

「シンクロ」

ややして、シュンはぼつんとつぶやいた。グラスから視線を移す。私を見た。まっすぐに見た。

「入って、引き付けられるらしいよ。自分と同じような気持ちを持つてる人に。そんで、気持ちを分かち合ったりするんだって」

「それが、シンクロ」

「そう。それが俺らが昨日出会った理由」

喉が渴いた。カーテンが、ふわりと舞い上がる。

空気穴が開いたような感じだった。それでいて、ぎゅっと、胸がつまった。

「じゃあ、シュンが私に、シンクロしてくれた、んだ」

「そう言いたかったんだけど、あるいは、ミホが俺にシンクロしたのかもね」

少し涙が滲んだ、シュンの目。一口含んだオレンジジュースは、とても優しい味がした。シンクロの相手、シュンでよかった。

「ありがとう」

「や、こちらこそ」

「シュン」

シュンだったから、て思えた。それは、シュンと私が、ずっと繋

がつて分かち合ってきた証。

シュンは首を傾げて、私の言葉を待っている。

「もしかしたら、あんたあんまり変わってないのかも」

「どっちだあー？」

「いや、私たち二人で過ごす空間が変わらなかったんだな」

「そうかもね」

シュンの眼差しは柔らかい。カラン。氷が音をたてる。

オレンジジュースのおかわりをつぐと、あったかい涙が一筋こぼれた。

（後書き）

ここまで読んでいただいてありがとうございます！

最近は全く暗い、あるいは気持ち悪い話続きだったので（自分の中では嫌いではないけれど）、リフレッシュを図ったんですが、思ったほどは転じずじまいでした；

最近

は「シンクロ」にはまってまして、これからも様々な形で書いていきたいと思っています。

感想や評価、お暇あればよろしく願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0220f/>

---

泣きそうな二人とオレンジジュース

2010年11月16日18時44分発行